優秀賞

「失敗のしっぱい」

学校法人市川学園 市川中学校 3年　阿部 汐栞

十五年あまり生きてきた私。失敗は数え切れないほどある。しかし、その中でも埋もれることなく、いつでも悲しいぐらい鮮やかな記憶が一つだけある。失敗と聞きふと思い出す度、喉の奥が居心地悪くきゅっとなる。そしてその度に、舌足らずな「しっぱい」が聞こえる気がするのだ。あの日は、夏だった。

あの時私は小学一年生、双子の兄も同じだ。仲良しの私たちは共通点も多かった。好きな色は青で、趣味はおしゃべりと木登り。毎日二人で秘密の話をして眠った。もちろん、違う所もあった。私は苺が好きだけど兄は苦手とか、私と違ってバトル物が大好きとか。そんな些細な違いをからかい合うのが好きだった。ただ、いつも成績の違いだけはそうしなかったのは、兄が気にしているのを未熟なりに知っていたからだろう。当時私は頭が良くて、なぜだか彼はそこまで良くはなかったのだ。

そう、いつもの私ならしなかった。けれどあの日の私はいつも通りではなかったのだ。特にこれといった理由はなかった。学校帰り、家はまだ遠くて、草がちくちく足を刺して、友達とも喧嘩していた。その全てが嫌だった。なのに兄は転び、ランドセルの中身をぶちまけた。教科書の角が、汗ばんだ額に当たったその瞬間、色々な気持ちがぐるぐる渦巻いた。どうしようもない感情。それは上手く言葉にされずに、私はこう叫んだ。

「頭が悪いしっぱいさく！」

と。傷つけばいいと叫んだ聞きかじった言葉たち。兄は一言、「しっぱいでごめん」とつぶやいて泣いた。何にも悪くないのに、気にしていたのに。強い罪悪感と声が、忘れられない。

兄は今は覚えていないらしい。相変わらず苺は苦手で、勉強も私が少しだけ得意だ。

でも、私はこれからもずっと忘れずにいるし、誰かをわざと傷つけるようなことはしないだろう。